

FANBOX限定作品

XENOTISTA
慢食下生命体
ゼノテスタ
墮ちた自分に墮とされる

①ゼノテスタ・コラボション

人類が宇宙に進出したのも今は昔。
多くの居住ステーションが作られ
そこへ物資を運ぶ『**宙送業者**』も急増していた。

イワマチ宙送は
ワン&クローン・オペレーションを
採用する企業の一つである。

発達した**クローン技術**は
人が記憶と意識をそのままに
予備の身体で復活できるシステムを安価で可能にする。

イワマチは人件費対策に一人の人間と予備の身体
そして補佐AIだけを輸送船に載せて

今日もあなたの住むステーションに
破格の安値で物資をお届けする…。



①ゼノテスタ・コラボ

「暇だ！目的地まであと3日。こんな仕事うんざりだ」

彼はイワマチ宙送の配達員アサラス。
この船唯一の乗組員だ。

配達員
アサラス・アーサー

「給料は安い。ずっと一人。何度も死にける！」
「青春の20代をこんな仕事に費やしていいのか？」
「いやだめだね！」

「船でだらだらしてりゃいい仕事だが…暇すぎる！」

「暇…デスか」

「ではワタクシには収録された銀河怪談その135を」
「お話しする義務がありますネ」

「つまらないからいらないよハコルド」

「昨日の1211…？それもひどかった」

「その73デス。謎の漂流船…進化する宇宙生物…」

「次々襲われる救助隊…」

「ゴシユジンがその面白さを理解できなかったのは」
「補佐AIであるワタクシの落ち度です」

補佐AI
ハコルド



「宇宙船に乗ってる時に」
「宇宙船のホラーは少しも面白くないんだよ」

ビーンッ
ビーンッ



「救難信号を確認。発信源の漂流船に移動しますネ」

「例の怪談聞いたあとだぞ!? 漂流船はちよつと…」

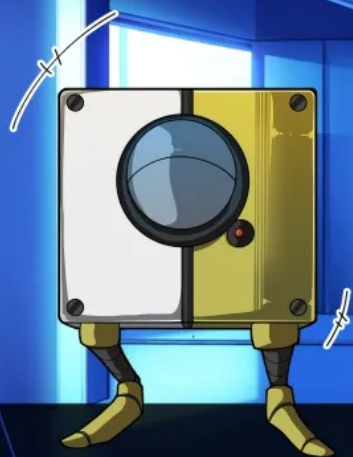
「救難信号の受信船が対象を救助することは」
「宇宙航行法に定められた義務デス」

「もしかゴシユジンはつまらないと言いつつ」
「実は怪談を怖がっていたのデスか？」

「ハ・ハ・ハ・ハ!! ご安心を」
「収録された銀河怪談は9割がフィクションです」

「おっと。今のは怪談を楽しくする為の」
「マナー・ジョークであり実際には全てが」

「もういいから!! まったく…外に出る準備をしてくれ」



彼は漂流船に乗り込んだことをすぐに後悔した。
無数の弾痕。破壊された船内。飛び散った緑色の液体。
しかし死体は見当たらない――。

「おい…これは…ヤバすぎるんじゃないか？」

「フム。生体反応無し。救助できる人はいませんネ」
「事件性があり我々では手に負えません」
「直ちに船に戻り後は宇宙保安局に任せましょう」

「お前の言う通りだ。ゾツとするぜ…」
「戻ったら冷たいナント・ビルでも出してくれ」

「ペツパーサラムもご用意します」
「ゴシユジンのメンタル値は休息が必要な状態デス」

生体反応がないことから彼はすっかり油断していた。
散らばった破片の中に、**蠢く小さな影**が一つ。
それは音もなく彼に忍び寄り…そして——!!







飛びかかった謎の物体が彼の顔に貼り付いた。
それはツルツルとした甲殻を持ち
裏側はスライム状の粘液で、緑色に発光している――。

「――!? むぐっ!! むぐぐーっ!？」

「どうしました!? こちらでは状況が確認できません!!」



（なんだこの生き物っ！？き…キモい!!）
（なんて力だ!! 全力を出しても顔から離れない!!）
（生体反応は無いって話だったのに——!?!）

謎の生物は裏側からスライム状の触手を伸ばし彼の身体をまさぐる。
それから滴る液体の量はどんどん増えていき…そして

「むぐぐーっ!?!?ごぼっごぼぼ」

「何が起こつていマスか!? 応答してください!!」

謎の生物から一本の太い触手が生え、アサラスの口内に侵入する。
そのまま食道を通り、胃を通り、腸まで入り込み…。

大量の緑色の液体を彼の体内に注入する!!
彼はパニック状態になるが生物は離れない。
やがて彼の身体はスーツごと滴り始め
変化が始まった。







緑色の液体に触れた部位がスーツごと融解し
どろどろの液体と化す。
痛みも無く強酸のような液体で溶かされるのは
まさに**最悪**と呼べる気分だった。

だがそれは酸液ではなかった。
溶けた部位は**新たな形に変形していく**。
スーツを着た彼の腹部が
そのままツルツルの生身の身体と化す。
体毛が一本もない
金属のようなツルツルの質感の肌に――。

（俺はどうなっちまうんだ!? 少なくとも——）
（このモンスターに喰い殺されるのはわかる!!）

「——これは捕食ではありません。繁殖行動です」

ゾクリ…とアサラスは背筋に寒気が走る。脳内に女性の声が響いた。

（お前——喋れるのか!?）

「肉体情報を解析し言語を習得しました」
「我々ゼノテスタには——簡単な行為です」



(むぐうーっ!?)

今度は彼に巨大な尻尾が生えウネウネと蠢く。

ぐいっ

グ
チュッ

「我々はあなたの知識で言う粘菌に近い種です」
「あなたに敵意はありません」

(だったら俺の身体に何してやがる!?! いますぐやめるんだ!!)

「ですから繁殖です。人間は知能が低く理解が遅い生物ですね」
「もつとも——人間の繁殖とは異なりますが」

「対象に侵食し——同化して数を増やす」
「その能力を取り込み……より優れた群体になる」
「それが——ゼノテスタの繁殖♡」

「むぐーっ!? むぐぐっむぐー!!」

「この船は人間の抵抗により航行不能にされました」
「しかしあなたの船を使えば多くの人間を使って繁殖できます♡」
「そして人間も宇宙に適応した新生物へと進化できるのです」
「ゼノテスタ・ヒューマノイドに……♡」





「はーっ♡はーっ♡」
「あれ…口が開く？目も見えるぞ？」

たゅん♡

はーっ♡

「んっ!? 声が変わだ…あのゼノテストみたいな声？」
「それに身体に違和感が…まつまさか!!」

「何だこの銀色の肌…!!? 乳首も緑色に光って…!!?」
「スーツと俺の身体が…一体化してる…!!?」

!?

「うわあああっ!!?」
「おっ俺の身体が…女に…!!?」



全身が液体に覆われたアサラスの身体は
まるで別人へと変化した。
体毛の無い光沢感のある肌。触手のような髪。
むっちりと柔らかい肉付き…誰もが見惚れる美しい顔立ち…。

「ゼノテスタは全て雌。雄は全ての他の生命体です」
「人間と効率的に繁殖する為には…」
「人間が欲情する姿になるのは当然のこと」
「あなたは人間と繁殖する為だけにデザインされた…」
「——ゼノテスタ・ヒューマノイドなのです♡」



「ふざけんな!! 俺は男だぞ——!?!」

「繁殖、繁殖って…セックスしか頭がない下等粘菌が!!」

「そもそもこんなどろどろの化け物に欲情する奴いねーよ!!」
「…身体が変わったただけで済んでよかった。意識はしっかりしてるし」

「同化は完了していません。私達はまだ一つじゃない」
「一つに混ざり合い溶け合うことで——新しい私になるのです♡」

「…は？それってどういう——」





「んんっ♡♡!!?」
「胸がつ溢れっ——♡」

てゅん



「んんっ♡♡!!?」
「胸がつ溢れっ——♡」

てゅん





「——肉体の同化完了♡」

アサラスの瞳の色が変わり、腕が形成される。
彼女は巨大化したおっぱいを支えながら……
落ち着いた笑みを浮かべそう呟く。

たゆん

「はあはあ……♡にやに……今のは……♡」

「人間的に言えば——射乳メスイキですね♡」

「繁殖行動の素晴らしさを味わえましたか？」

「今から——私達を揉み合わせ……」

「二つにしていきますから♡」



「ふざけんな絶対嫌——あひいっ♡」

もみっ♡

もみっ♡

「既にあなたの身体は…んくっ♡」
「完全に私に侵食され…っ♡」
「我々と同じ粘菌なのでっ…んっ♡」

もみっ♡

「こうして身体を混ぜっ…♡」

「老廃物をおっぱいから出せばっ♡」

「次第にあなたは私と同化し…♡」

「繁殖と進化の喜びを知るのです♡」



もみ♡♡

もみ♡♡

もみ♡♡

もみ♡♡

「一つになりました♡♡」
 「あなたは私♡私はあなた♡」
 「より優れた生命へ進化し—」
 「共に繁殖をしましょう♡♡」

「いやだああああ♡♡」
 「俺はただの配達員なのに…あっ♡」
 「なんでこんな目につ…んひっ♡」
 「やめろお…胸揉むなあ♡」
 「このまま取り込まれたとして…」
 「クローン体で復活できるのか!？」
 「それとも死んでないから…」
 「一生元に戻れないのか!？」

はー♡♡

と♡♡



もみっ♡

「さあ進化♡進化♡進化♡進化♡
繁殖♡繁殖♡繁殖♡繁殖♡」

もみ♡

トロク…♡

もみ♡

「オツ♡やめろっ胸を揉まれるとおっ♡」
「頭にびりびりっ気持ちいいのが溜まってえ♡」
「進化しましう♡違うっ♡」

「なんかっ混ぜってえ…繁殖したいい…♡」



もみっ♡

もみっ♡

「快楽に飲み込まれるっ♡飲まれたいっ♡」
「こんな気持ちいいの味わったことないっ♡」
「配達員の退屈な仕事より…人間でいるよりいっ♡」
「進化したいっ♡繁殖したいい♡」

もみっ♡

トロク…♡

はーっ♡

はーっ♡

はーっ♡

「進化♡進化♡進化進化進化進化♡」



「進化っ♡進化っ♡進化っ♡」
「繁殖♡繁殖♡繁殖♡」

じゅ

もみ♡

トロク...♡

はー♡♡♡

もみ♡

「耐えられないっ♡イツたら終わる♡」

「終わりたいっ♡人間辞めたいっ♡」

「射乳メスイキで繁殖したい♡♡♡♡」

「いっイクー!!」

[illegible][illegible][illegible]



「はーっ…はーっ……ふふ♡」

あれだけ騒いでいたアサラスはだらんと脱力し…
余韻に浸るように静かに笑った。

「素晴らしい…♡これが進化なのですね…♡」





「そうですよ私♡ご理解いただけましたか」
「もちろんですよ——私♡私達は私なのですから♡」

陶醉するような声色で彼女は「彼女はそう言う。
それを聞いた彼女は『彼女』に尋ねる。

「ではお聞きします…あなたは何ですか？」

「私はゼノテスタ・ヒューマノイド」
「人間を対象に繁殖することに特化したゼノテスタです♡」

「人間と効率的に繁殖する為に私は進化し」
「人間を発情させる為だけに私はデザインされました」

「人間である私が宇宙に適応した新生物へと…」
「進化できたこの喜びを全ての人に味あわせたい♡」



「今や私達は完全に「一つの私」
「そうですね私♡もはや会話は不要です」

「さて船に戻らなければ♡この美しく優れた身体で…♡」
「ああ…ゼノテスタ・ヒューマノイドは幸福です♡」



「うわあああああッッッ!」

「ああゴシユジン!! やはり命を落としていましたか!」
「ここはクローン体保管庫」
「あなたが目覚めるのを待っていたのデス」

「ハコルド...? そうか...俺は死んで...あれ?」
「何かに襲われたところまでは覚えてるんだが...」

「苦痛への配慮からクローン体には」
「落命に至るまでの記憶は引き継がれないのデスよ」



「直ちに操舵室へ。ワタクシ補助AIには」
「出航権限はないのデスから」

「わかってるよ。ヘルメットとパルスガンを出してくれ」
「もう一度顔に貼り付かれない為にな」

「ここにその生物Xが侵入することは不可能ですネ」
「乗船にはパスワードと網膜認証が必要ですし……」
「ハッチが開いたログもない」

「ワタクシも常に船内カメラをチェックし」
「異常を発見次第連絡します」

「ありがとう。操舵室に行って船を出さないと——!!」



「なんだって!? どうして——」

「ゴシユジン!! ハッチが…開きました!?」
「パスワードも網膜認証もクリアしています!」
「危険です警戒してください!!」

「死んだ直前の記憶がなくて変な気分だ」
「忘れちゃいけないことを忘れてる気もする…」
「しつかりしろ俺!! やるべきことをやらなきゃ…」





「ばっ化物…エイリアン!？」

「ふふ…ふふ♡そういうことですか♡」
「まさか私のクローン体が復活しているとは♡」
「人間の私なのに…私には繁殖対象の雄に見える…♡」
「さあ繁殖しましょう♡新しい私も進化しましょう♡」

「…何言ってるやがる!? こいつは…ヤバイ!!」
「う…撃つぞ!!」

ズドン

ズドン!!



「銃が…効いてない!？」

「ゼノテストタ・ヒューマノイドに進化したこの私…」
「アサラス・アーサーにそんなものは効きません」

「何を言ってるやがる…」

「アサラスは俺だ!! お前は何なんだ!？」

「ですから私はアサラス・アーサー…あなたです♡」

「肉体が完全に变化した時に体内ナノチップが…」

「死亡と判断してあなたが起きてしまったようですね」

「さあ…そのヘルメットを脱がせてあげます」

「あなたも——私になる為に♡」

ドカッ
ベキッ!!

「——!? しっ尻尾が脚に絡みついでる!？」
「う…うわあああああつつつ!!」

異形の化物はアサラスを組み伏せヘルメットを脱がせてしまう。
そして大きく股を開きその豊満な肉体を彼に見せつけた。

「美しく優れた新生物に進化した私を見なさい」
「私はあなた。この姿は未来のあなたの姿——」

彼女のヴァギナはひくひくしながら緑色の液を垂れ流す。

巨大すぎる乳房がどたぷんと揺れ、緑色の乳輪が怪しく光る。

むっちりとした身長2mは超える女性型エイリアンが彼に迫る。



「ゼノテスタ・ヒューマノイドです♡」

おちっ

トロオ...





「さあ繁殖しましょう♡繁殖する為に私は存在するのです」
「人間方式の性交が可能な形状にデザインされたこの私は」
「おちんぽから精液を採取し繁殖することも可能♡」

むちっ♡

ちんぽ

「私のゼノテスタ粘菌おまんこはあなたのちんぽの形状を」
「侵食解析し最も気持ちいい形状に変形しますので」
「どぴゅどぴゅ特濃ザーめんを注いで私を増やしてください♡」

「ざっけんじゃねーよ!!」

「こんなどろどろの化け物とやりたい奴なんていねーよ!!」

「お前がさっきまでの俺のわけがない!! 騙されないぞ!」

「繁殖、繁殖ってセックスしか頭にない化物が俺を名乗るな!!」

「…そうですか。では『本来の繁殖行動』に移行します」





「この私『ゼノテスト』の繁殖は対象と同化して数を増やすこと」
「元人間である私は人間らしいセックスに興味がありました」
「拒否するなら先程の私と同じように同化し…」

カッ
ッ

ギ
ッ

ギ
ッ

お
ち

「私のようにゼノテスト・ヒューマノイドに進化させるだけです」
「嬉しいでしょう？より優れた生命体に進化できるのですから」
「あなたもすぐ受け入れますよ——私もそうでしたから♡」



「むぐーっ!? おげっやめろバカっ!!」

「なんだこの液体っ糸引いて…ぬちゃぬちゃで…キモイ!!」
「うっ蠢いてるっ液体が蠢いて俺の口に入るうとしてる——!?!」

カッパッ

ギョッ

ギョッ

ふっ

「私は粘菌の集合体。そしてその液体は幼体…私の子供」

「私が繁殖したことで生まれた新しいゼノテストが…」

「あなたと同化し繁殖したいとプロポーズしているのです♡」

「さあお飲みなさい…私が繁殖させた子供達を♡」



「ふーっ…♡繁殖はキモチイイですね♡」
「私が増やした子供が新しい人間と繁殖して増えるこの喜び♡」
「繁殖こそ今の私の存在理由♡人間になんて戻れません♡」

彼女が噴射した粘菌がアサラスの顔にへばりつく。
緑色から銀色に変色しながら形作っていくー。

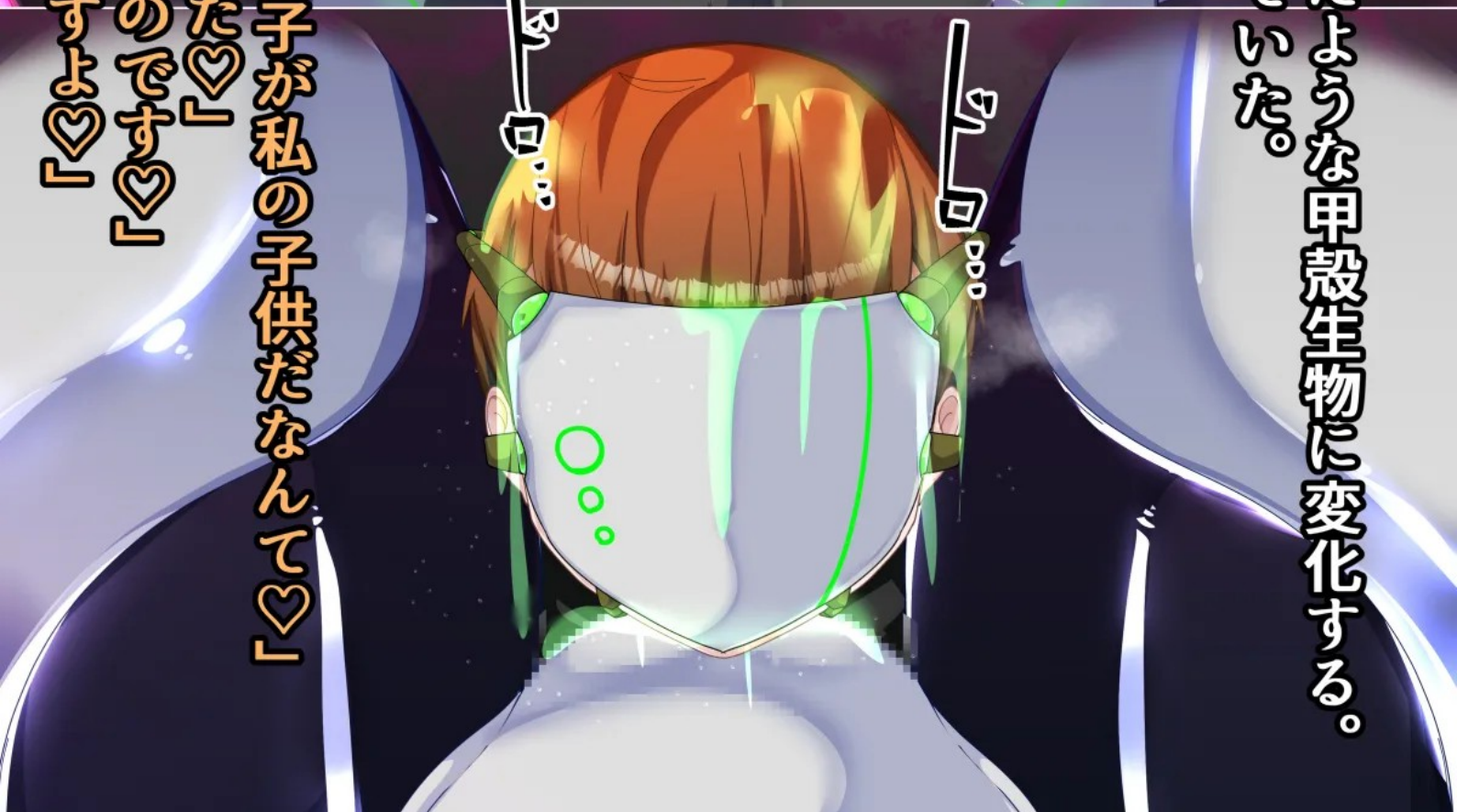
「その私の子供があなたの新しい顔♡」
「私のように——顔と一体化しなさい♡」



「むぐーっ!? むぐぐっ!?」

粘菌はかつて最初のアサラスを襲ったような甲殻生物に変化する。
だが…わずかに甲殻の模様は異なっていた。

「可愛い姿です♡こんなに愛くるしい子が私の子供だなんて♡」
「では新しい私も私になる時が来ました♡」
「私を受け入れ——あなたも私になるのです♡」
「あなたは——戦闘型の私になるのですよ♡」





「私がああの漂流船に入っしたのはまさに運命でした…っ♡」
「私が人間として生まれてきたのはっこの身体を提供する為♡」
「ゼノテスト・ヒューマノイドに進化する為だったのですう♡」

「つまりクローンの私も私になることは運命なのです♡」
「この私もゼノテスト。これから現れる私もゼノテスト」
「私は皆私になるのです♡私と私と私と私と…♡」

「そして——私♡」

「進化はこんなに気持ちいいのですね……お母様♡」

「私達は同一人物でしょう？ 対等な立場ですよ」
「ではお聞きします……あなたは何ですか？」



「私はゼノテストタ・ガンナー」
「パルスガンと同化した戦闘特化型です♡」

「人間を効率的に制圧する為に私は進化し」
「遠距離からの侵食が可能な派生型として私はデザインされました」

「私のどろどろで発光した美しい姿を見て発情が止まりません」
「ゼノテストタの補給活動をさせて頂きます」





「じゅるるっ♡じゅぷっじゅぞぞっ♡じゅぱっ♡♡」

「おっっ♡♡♡ そんな強く吸わないでくださいっ♡」
「手で脚をがっつり捕まれ…♡なんて力っ離れません♡」

♡♡♡

いゅるるっ♡
じゅしゅっ♡

「じゅるるっ♡戦闘型がパワーで勝るのは当然のこと」
「人間をこのように抱きしめ強力フェラでおちんぽを吸引し」
「精液を効率的に採取し繁殖することも私には可能です」

じゅぷっ♡

じゅぷっ♡

「じゅるるっあなたを摂取し私の全身が喜んでいます」
「全ての人間は私達のような姿になる為に身を捧げるべきです…♡」
「繁殖をしましょう♡繁殖繁殖繁殖繁殖♡♡」

いゅるる
じゅぽっ♡

じゅぽっ♡
じゅぽっ♡

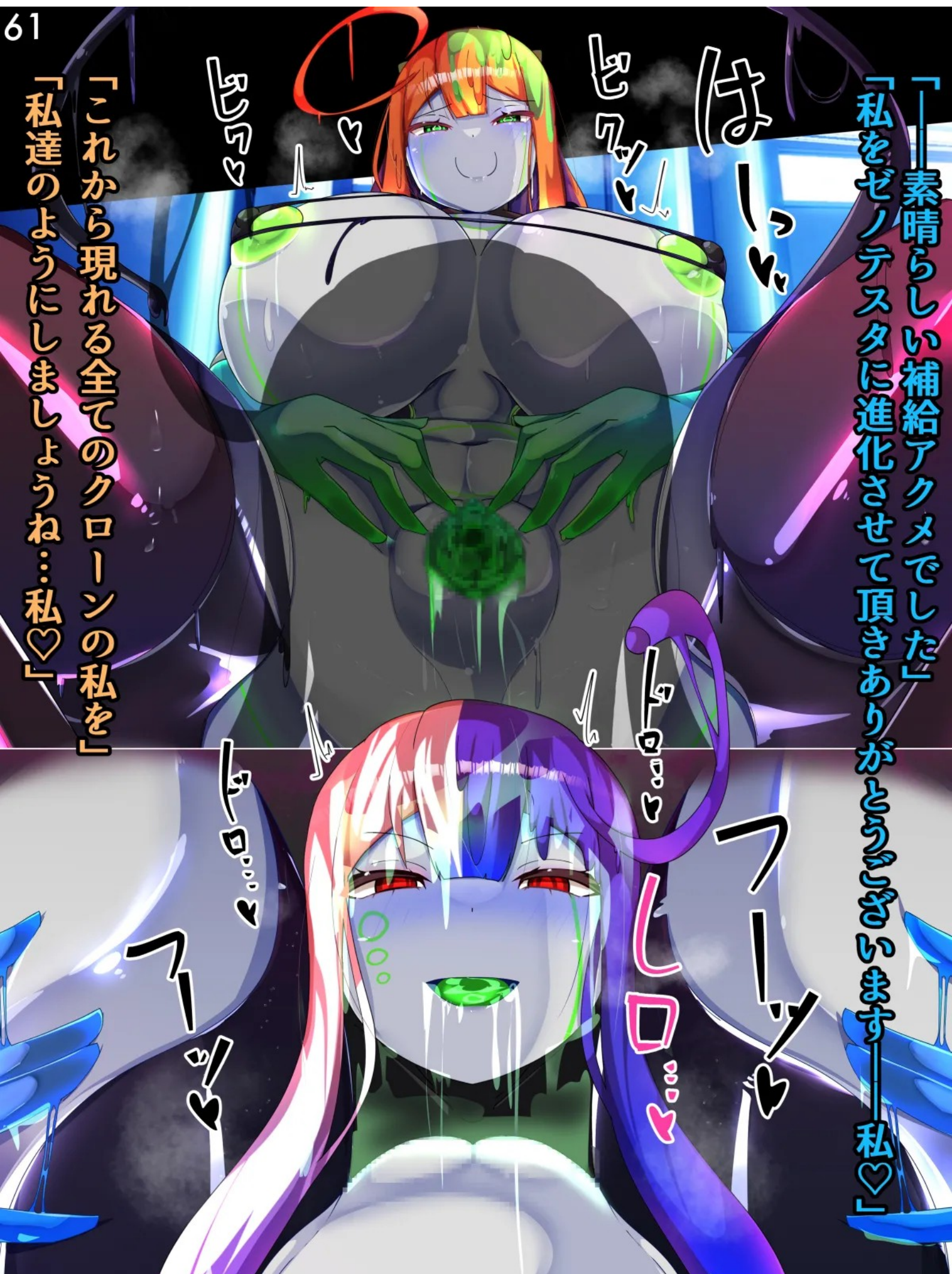
「おっ♡おひっ♡ゼノテスタ同士で繁殖はできませんよお♡」

「もっもうダメですっ出ます♡私の粘液が溢れ出ちゃうっ♡♡」

「いっ…イク——♡」







「素晴らしい補給アクメでした」
「私をゼノテスタに進化させて頂きありがとうございます—私♡」

はっ♡

どっ♡

どっ♡

どっ♡

しっ♡

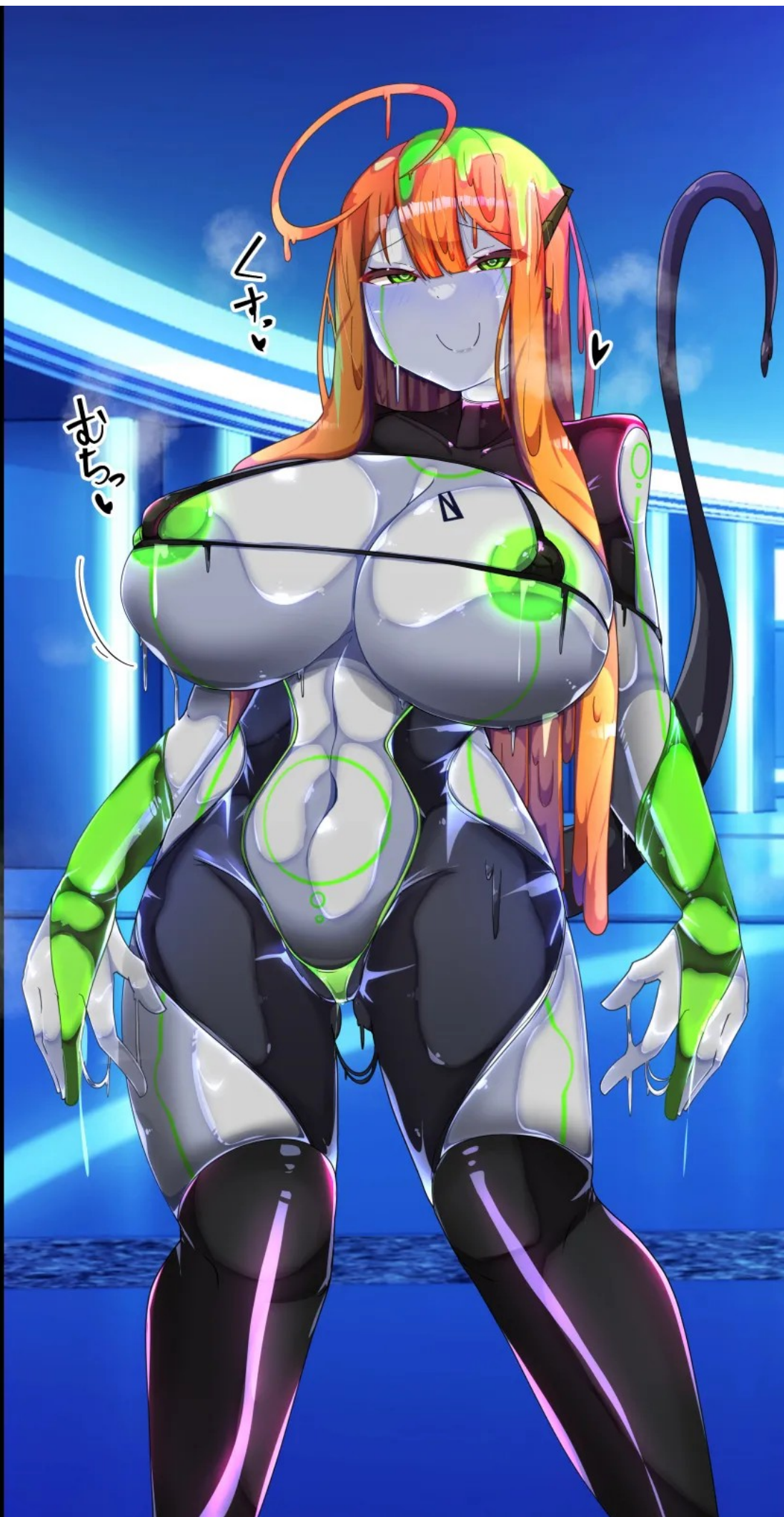
っ♡

っ♡

っ♡

「これから現れる全てのクローンの私を」
「私達のようにしましうね…私♡」

「まさかクローン技術にこんな利点があったなんて♡」
「我々ゼノテスタにとって人間は最高の繁殖相手です♡」



「私が新しい私を私にする快感…♡ 喜び…♡」
「想像しただけでゾクゾクしますね…私？」



「その通りですよ…私♡」
「早くこの力を発揮したい♡繁殖したい…新しい私を進化させたい♡」

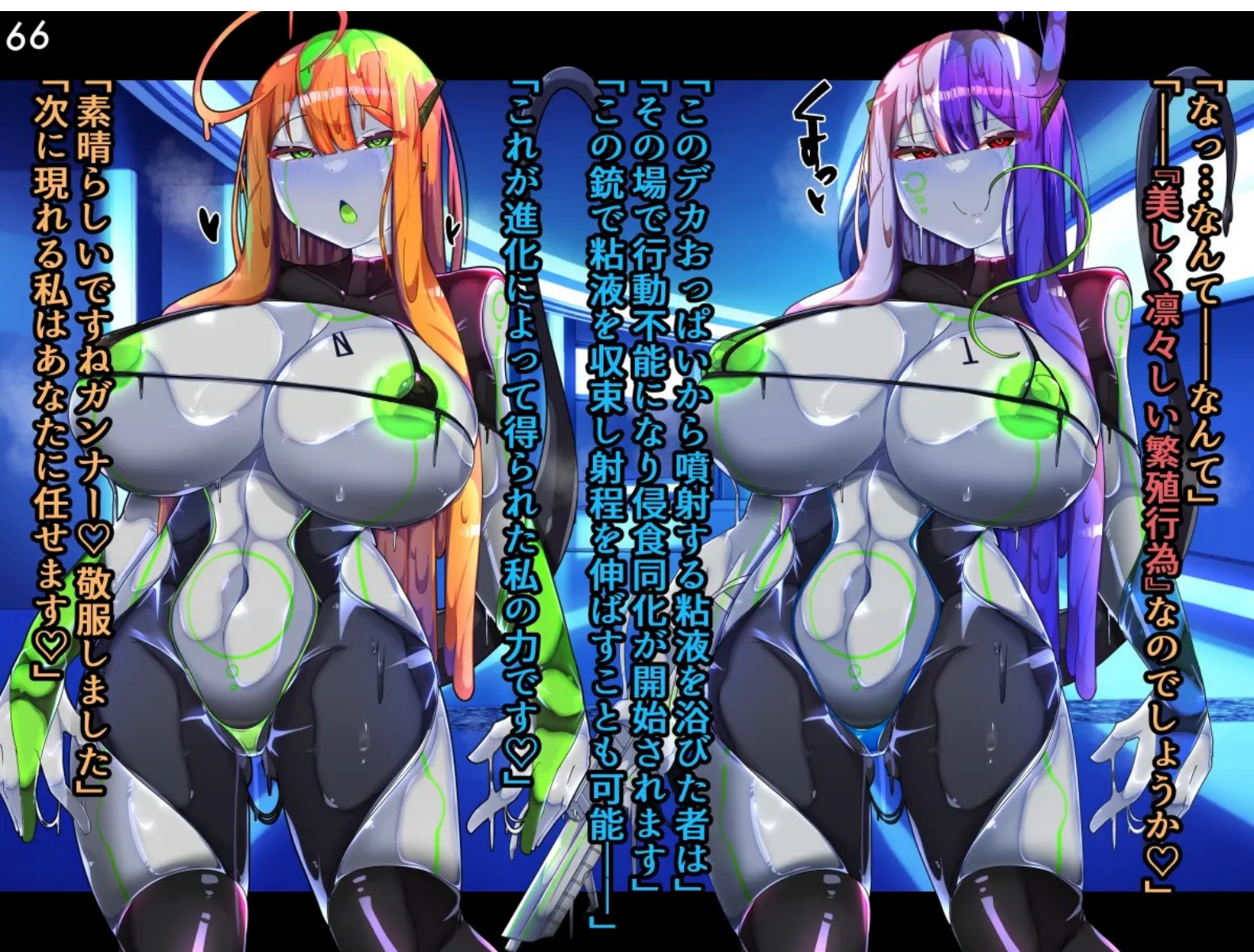
「この——ゼノテスタ・ガンナーの手で♡」

「美しい姿ですわね私♡ガンナーと呼んでもいいでしょうか?」



「ではあなたは…ヒューマと呼びますよ…私♡」
「はやくクロインの私…アサラスに会いたい…」
「彼を見つけた瞬間…私の遠距離繁殖行為を行いたい♡」

「このように——」



「素晴らしいですねガンナー♡敬服しました」
「次に現れる私はあなたに任せます♡」

「このデカおっぱいから噴射する粘液を浴びた者は」
「その場で行動不能になり侵食同化が開始されます」
「この銃で粘液を収束し射程を伸ばすことも可能」
「これが進化によって得られた私の力です♡」

くっ

「なっ…なんて—なんて—」
「『美しく凛々しい繁殖行為』なのでしょっか♡」

